doi：10. 20776/S13482084-71-P91
千葉大学教育学部研究紀要　第71巻　91～97頁（2023）

日本の音楽をアクティブに学ぶ授業プランの提案と検証
―雅楽《越天楽》を教材とする「音楽づくり」の授業実践事例―

本　多　佐保美
千葉大学・教育学部

Proposal and Verification of a Lesson Plan for Active Learning of Japanese Music
：A Practical Case Study of a Music Making Classroom Lesson Using *Gagaku* "*Etenraku*" as a Teaching Material.

HONDA Sahomi
Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では，日本の伝統音楽である雅楽を子どもたちがアクティブに学ぶことを目指し，授業実践プランの提案とその実践検証を行った。雅楽《越天楽》および《越天楽今様》の鑑賞と唱歌の体験，そして音楽づくりの活動との往還により，雅楽のよさ・本質を子どもたちが深くとらえることを目指した。個人およびペアでの旋律づくりを様々試す中で，旋律の動き方やリズム等を自身の感覚と照らし合わせ思考を働かせながらつくる児童の姿が見られた。また各活動ごとに適切な問いを投げかけ，自分たちの活動の意味を言葉で明確に捉えさせることをとおして，子どもたちの思考を活性化させ，最終的には，全ペアが自分たちの雅楽の旋律をつくりつなげて発表し，雅楽のよさや美しさを児童なりの言葉で全員が記述することができた。

キーワード：アクティブに学ぶ（Active Learning），雅楽《越天楽》（*Gagaku* "*Etenraku*"），
音楽づくり（Music Making）

1．はじめに

本研究は，日本の伝統音楽を子どもたちがアクティブに学ぶための授業実践プランの提案と実践検証を行い，指導の手立ての詳細とその結果を報告するものである。

本研究の背景には，2014（平成26）年以降，継続的に進めてきた共同研究の進捗がある。この共同研究は，民族音楽学者であり日本伝統音楽研究者であった小泉文夫（1927-1983）の提唱した理念を再検討し，広く世界の音楽[1)]に子どもたちが親しめるような具体的な授業教材開発を進めるプロジェクトである。

これまでに，小泉が編集に関わった中学校音楽教科書の内容分析や，ユネスコ・アジア文化センターによる「アジア地域音楽教材共同制作事業」の概要を把握することで，小泉の理念の教科書や教材楽曲への具現化の様相を明らかにすることを試みてきた（本多 2017，2021）。また一方で，小泉の理念をふまえ，我が国の音楽やアジア地域の音楽の教材開発と授業実践研究を行ってきている（大田・本多 2020，本多ほか 2019，2020，2021）。

アクティブに学ぶということについて，小泉が直接的に述べているわけではないが，子どもの音楽的な自発性を育てるという視点から，「音感は（中略）身体や言葉や思考形態と関係が深いもの」であること，そして「子どもが本当に生活の中で必要としている歌はわらべうた」であり，「わらべうたの音階は，民謡の音階と本質的に同じものであって（中略），日本のあらゆる音階の中でもっとも重要な，基本的な音階である」と自国の音感に基礎をおいた学習から音楽教育を出発することの重要性を強調し，当時の音楽教育界に多大な影響を与えた。加えて「子どもの本来もっている自発性から出発し，幅広く基礎を固めていけば（中略），洋楽はもちろんのこと，伝統音楽やアジアの音楽，さらにあらゆる現代的表現にも適応できる」との理想を掲げた（小泉 1986）。

一方，アメリカの民族音楽学者であり音楽教育学者でもあるワシントン大学のP.S.キャンベルは，アメリカの多文化音楽教育の文脈において，世界の様々な音楽を学習する具体的な方法として，以下の５点を提案している（Campbell 2004）。

⑴Attentive Listening 音楽の諸要素に注意して集中して聴く
⑵Engaged Listening 体を動かしながら聴く
⑶Enactive Listening リスニングの記憶に基づき実際に演奏する
⑷Creating World Music 創作する
⑸Integrating World Music 総括する，総合する

キャンベルの提唱する世界の音楽の学習方法は，集中的・分析的に音楽を聴き，聴き取ったことを自らの表現（演奏や創作）に生かし，最終的に音楽の生きている文化的文脈や文化的背景等の知識と総合して音楽を理解するということである。

また一方で，今日的教育課題の一つとして「主体的・対話的で深い学び」の実現が提唱されている。「主体的・対話的で深い学び」，すなわちアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善においては，各教科での学習活

連絡先著者：本多佐保美　honda@faculty.chiba-u.jp

動，とくに言語活動や観察・実験，問題解決的な学習等の質を向上させること，各教科における物事を捉える視点や考え方（「見方・考え方」）を働かせ，学習者の思考（音楽科においては音楽的思考）をいかに活発にしていくかが求められている（文部科学省 2018）。

アクティブに学ぶ，主体的に学ぶとはどういうことか。松下佳代は，ボンウェルとアイソンの概念規定をふまえ，以下の６つをアクティブ・ラーニングの特徴としてあげている（松下佳代 2015，pp. 1－3）。

(a)学生は，授業を聴く以上の関わりをしていること
(b)情報の伝達より学生のスキルの育成に重きが置かれていること
(c)学生は高次の思考（分析，総合，評価）に関わっていること
(d)学生は活動（例：読む，議論する，書く）に関与していること
(e)学生が自分自身の態度や価値観を探究することに重きが置かれていること
(f)認知プロセスの外化を伴うこと

ここでいう学生を児童・生徒に置き換えて考えるなら，単に教師からの知識伝達にとどまらず，児童・生徒が何らかの活動をとおして資質・能力を伸長させること，自らの学びを分析し総合することによって自身の態度の探究と価値形成が促されることが重要だといえる。この価値形成とは，音楽科でいうならば，音楽のよさや美しさを自分なりに意味付けできることだと考えられる。

対話的に学ぶ，すなわち協働的な学びについては，グループの協働により生まれる創造性を研究するＫ．ソーヤー（邦訳，2009）が参考になる。ソーヤーは，アメリカ，ワシントン大学の心理学の教授で，シカゴ大学にてチクセントミハイに師事し心理学の博士号を取得した。ジャズ・グループの即興場面の観察などにもとづき，グループによる創造性が発揮されるための条件として，適切な目標，深い傾聴，主体性の保障，参加者全員が同等であり，適度な親密さがあること等を指摘している。

さらに，音楽科における文献を参照するなら，たとえば平野次郎は，児童にとって主体的な学びとなるようにするために教師は，「子どもの感覚，これまでに獲得してきた資質・能力，学びの系統性などを総合的に判断」する必要があること，また，子どもにとって魅力的な楽曲や教材とするために，「その曲の生かし方や見方，関わり方，すなわち指導法を探ることで主体的な学びが実現する」と述べている（平野次郎編著 2017b，p. 16）。

これらの知見をふまえ，本稿においては，アクティブに学ぶ，主体的に学ぶとは，「学習者が試行錯誤や探究活動をとおして自身の思考を活発に働かせている状態であり，自らの学びの分析と総合により価値形成が促されること」と定義する。音楽科においてアクティブに学ぶことを保障する手立てとしては，１．集中的に音・音楽を聴き，聴いたことを表現に生かす，２．唱歌（しょうが）の体験などに見られるように，自らの身体をとおして聴くことと表現することとを連動させる，３．音楽をつくる活動を取り入れることによって，音を操作し，試し，自分にとって意味のある音楽とする，４．協働的につくることで，より活発な思考を促す，といった点に配慮して授業を構想することとした。

２．雅楽の授業プラン構想

本多はこれまでにも，小中学校の音楽科教員と協働しながら，雅楽の授業プランを提案してきた。それは，雅楽《越天楽》の響きに親しみ，その音楽のしくみの理解を深めるため，唱歌（しょうが）をうたう体験的活動を取り入れ，また雅楽の打ち物（打楽器）に注目し，そのリズムパターンを集中的に聴き取ったり，代替楽器で実際に身体を動かしたりしながら唱歌に合わせてリズムパターンを打ってみるというものであった（本多　1995，2020）。

本研究では，雅楽《越天楽》の音楽的理解にせまるために，よりアクティブな学びが実現するように，新たに音楽づくりの活動を取り入れた授業を構想した。以下，項目ごとに構想した授業プランの概要を示す。

2.1　題材名「自分たちの雅楽《越天楽》をつくろう！」（小学校第６学年または中学校第１学年）[2)]

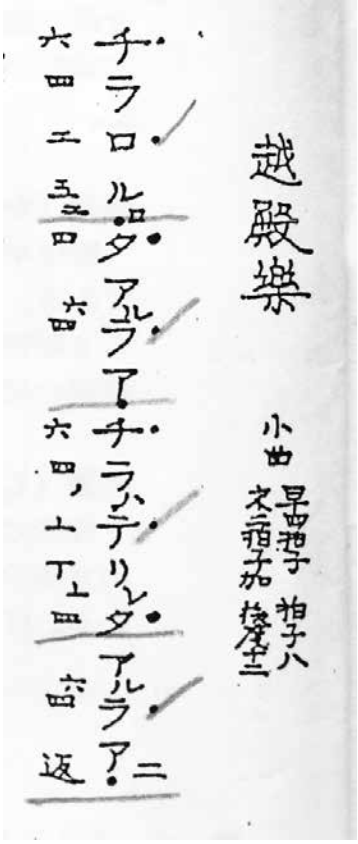
2.2　児童生徒に育てたい資質・能力

【技能】
・曲の感じをとらえながら，旋律のつながりを意識して自分たちの《越天楽》の旋律をつくる。
【知識】
・《越天楽》の楽器について知り，それぞれのパートの役割を理解する。
・ゆったりとした拍の流れにのって，《越天楽》の唱歌をうたう。
【思考力・判断力・表現力】
・鑑賞で感じ取ったことや学んだ知識を生かして，創意工夫してまとまりのある音楽をつくる。
【学びに向かう力・人間性等】
・友達と協力しながら，意見交換し，《越天楽》ふうの曲をつくったり，演奏したりする。
〔共通事項〕リズム，旋律，拍の流れ，速度

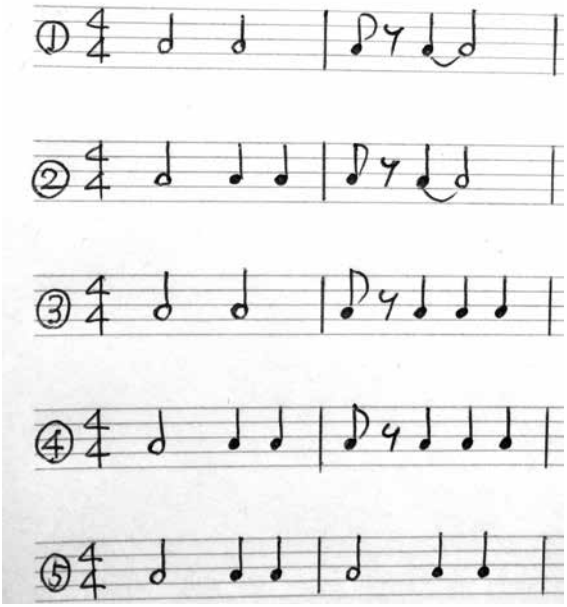
2.3　指導計画（全３時間）

第１時
雅楽《越天楽》の楽器やパートの役割を知る
①雅楽《越天楽》を鑑賞し，用いられている楽器の名称と役割を理解し，その響きを感じ取る。
②楽譜１を見ながら篳篥の唱歌をうたい，ゆったりとした雅楽の拍の流れを感じ取る。
③《越天楽》の楽曲の特徴はどんなところにあるか，意見交換する。
④楽譜２のリズムパターンを提示し，レミソラシの音（楽譜３）の中から２音や３音を選び即興的に２小節の旋律をつくる。

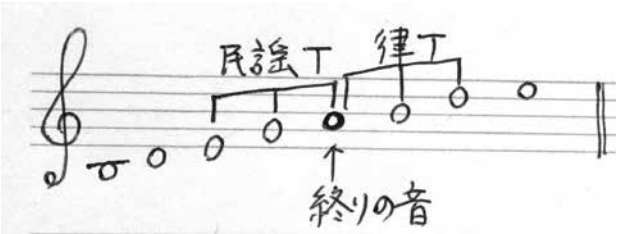
楽譜２のリズムパターンは，《越天楽》の旋律の中でよくみられるリズムパターンを抽出したものである。楽譜３の音列は，《越天楽今様》にあらわれる音をすべて拾い出して並べた音列である。ラの音が真ん中の核音となり，



楽譜１　篳篥の唱歌譜



楽譜２　《越天楽》の特徴的なリズムパターン



楽譜３　《越天楽今様》の音階

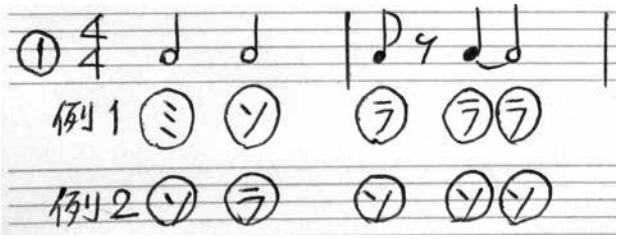
ミソラの４度枠（民謡のテトラコルド）とラシレの４度枠（律のテトラコルド）が連結している形である[3]。《越天楽今様》において，楽曲の終わりの音はラとなっている。この音の並びは，わらべうたによく見られる音の並びである（小泉文夫編 1969，pp. 364-365）。

第２時

雅楽らしい旋律を自分たちで考えてつくる

①雅楽の演奏映像を見て，雅楽の曲の特徴や雰囲気，音の動き方等を確認し，自分たちの創作や演奏に生かす。

②譜例２のリズムパターンから１つ選び，「レミソラシ」から音を選んで，まず個人で２小節の旋律をつくる。リコーダーや鍵盤ハーモニカ，キーボード等で音を試しながら旋律づくりを工夫する。楽譜４はその一例である。



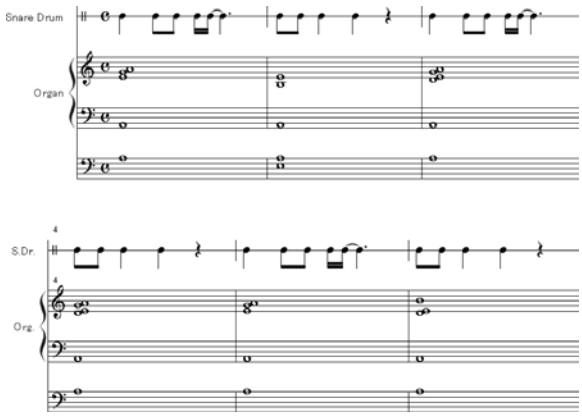
楽譜４　旋律づくりの例

③４人グループになり，各自つくった旋律をつなげてみる。それぞれの旋律のつながりを考え，演奏する順番を入れ替えたり，終わる音やはじめの音を変えたりして創意工夫してつなげる。

第３時

お互いに演奏を披露して聴き合う

①楽譜作成ソフトPrint　Musicで作成したドローン（持続音）の伴奏音源（笙の音をオルガンの音色で，楽箏のリズムをスネアドラムの音で入れたもの，楽譜５）を伴奏として，自分たちでつくった雅楽《越天楽》を演奏する。



楽譜５　《越天楽》の伴奏音源の楽譜

②お互いに鑑賞し合い，気づいた点や，さらにこうしたらいいと思うアドバイスを意見交換したり，ワークシートに記入したりする。

③最後にもう一度，雅楽《越天楽》を鑑賞し，自分たちの創作・演奏活動をふまえ，そのよさやおもしろさを味

わい，ワークシートに記入する。

2.4　想定する授業の流れと発言例

以下，各活動のねらいと，想定しうる教師と児童生徒の発言の一例を示す。

第１時

●鑑賞では，直観的な出会いを大切にする。
Ｔ：どんな感じがしましたか？
Ｃ１：うねうねとした感じがしました。
Ｃ２：かなしげな感じ？
Ｃ３：どこが区切りかわからない。
Ｃ４：時々，チン，チンって金（かね）の音が聞こえる。
Ｃ５：大太鼓の音が，ズンって入る。
●唱歌をうたう活動も，うたったあとに考えを出させたり，言葉にしておくとよい。
Ｔ：唱歌をうたってみて，どうでしたか？
Ｃ１：息が長かった。
Ｃ２：「チ」が何を表しているのか，「ラ」が何を表しているのかな，と思った。
Ｃ３：「ラリルレロ」が多くて，それが旋律のなめらかな感じを表していると思った。
Ｃ４：ゆっくりなので，リズムをとりにくい。みんなで合わせてうたう時，むつかしかった。
●リズムパターンを使って，「レミソラシ」の音で旋律をつくる。
①まず教師が手本を示し，まねさせる。慣れてきたら，生徒の一人が教師役になって，みんながまねをする。
②「レミソラシ」から選ぶ音は，最初は１音だけでもよい。だんだん２音，３音と増やしていく。
③なるべく隣り合った音で動くとよい。できれば，どんな音の動きにすると雅楽っぽくなるのか，児童生徒に考えさせたい。

第２時

●鑑賞曲を参考に，雰囲気をとらえて，まず個人で２小節の旋律をつくる。どのような旋律をつくろうと思ったか，言葉にするように促す。
Ｔ：どんな旋律をつくろうと思ったかな？
Ｃ１：音がだんだん上にあがるようにしてみました。
Ｃ２：いったん上がって，また下がるようにしてみました。
●各自がつくった旋律を，４人でつなげてみる。音にして試しながら，つなげ方を色々と考える。
Ｃ１：旋律の終わりの音から，また始まるように，しりとりみたいにしたらどうかな。
Ｃ２：Ａさんの旋律は，終わりっぽい感じがしたから４番目がいいんじゃない。
Ｃ３：全体で，下の方から上の方にあがって，また下の方におりてきて終わるようにしたらどうかな。

第３時

●お互いに演奏を披露して，聴き合う。それぞれがつくった曲の特徴やよさに気づけるようにする。ドローン伴奏（楽譜５）を活用して，雅楽の雰囲気を出す。
Ｃ１：このグループは，ＡさんとＢさんが呼びかけ合うような旋律で演奏していました。
Ｃ２：このグループは，リコーダーの音をゆらしたり，指穴を打ったりして，雅楽の雰囲気を出していました。

３．実践授業の実際

3.1　授業の概要

実際の授業は2022年１月に，千葉大学教育学部附属小学校の６年生を対象に，出山雅敏教諭によって行われた。本多が提示した授業構想に沿いながら，細部では出山教諭ならではの工夫が見られる授業が展開された。雅楽《越天楽》と《越天楽今様》両方を扱い，鑑賞の時間や音楽づくりの時間を十分にとったため，実際には全４時間の授業となった[4)]。コロナ禍に配慮し，リコーダーや鍵盤ハーモニカの使用は避け，ミニキーボード（カシオSA-46）を使って授業を行った。

3.2　授業の各場面の詳細

以下，授業の各場面についてトピック的に抽出して記述する。

3.2.1　第２時　唱歌を聴いて意見交換する場面

篳篥の唱歌をうたう動画をじっくりと聴き，児童自身もうたってみる体験をしたあと，気づいたことを出し合った。楽譜１の篳篥の唱歌譜は，児童の手元にプリントとして配布されている。
Ｃ１：アって書いてあるのは，アーアーって感じ〔声を押しながらうたう〕。
Ｃ２：〔唱歌の言葉は〕何かを意味しているというよりも，音程をとるためのもの。
Ｃ３：同じ文字をのばしているあいだにも，音程が変わっている。今までやった日本の曲でも同じ。
Ｃ４：聴いていると，日本語というよりも外国語みたい。
Ｃ５：母音をうたう時に，右下に小さくアとかエとか書いてある。
といった様々な意見が出された。児童は，以前の学習も思い出しながら，篳篥の唱歌の声の微妙なゆれや，母音をたっぷりとのばす感じをよく聴き取っている。

3.2.2　第２時　雅楽らしい旋律を個人でつくる場面

実際につくってみたあと，教師の「どうしたら雅楽っぽい旋律ができるかな」，「雅楽っぽい音って，どんな音の動きなんだろう」という問いに対していくつかの発言があった。
Ｃ１：下の方のシとレとを組み合わせた方が雅楽っぽい。
Ｃ２：２度みたいなぶつかる音とか，近くにある音を使った方がいい。
Ｃ３：いきなり〔音が〕飛ぶと変な感じ。

題材の最後に学習の振り返りとして書かれたワークシートにも，「雅楽の旋律をつくってみて気づいたこと（工夫・意識したこと）を書きましょう」という問いに対しても，同様の記述が多く見られた。
・音の終わりと始めの音を同じ音，または近い音にした。
・自分の旋律２つをまとまりのあるように〔するために〕，同じリズムにした。

・２回くらい同じ音を入れるとそれっぽい気がする。下から上がっていく感じがかっこいい。
・急に音がとばないように工夫した。
・雅楽はゆっくりなイメージだから，低い音の方がよいと思った。
・全ての音から始まる旋律を考えた。ソで終わるのは，必ずつくった。終わる感じだから。
・音をどんどん下げていくと終わりやすかった。

試行錯誤して個人で旋律づくりを色々試す中で，旋律の動き方や，どの音で始まるか，終わるか，どのリズムにするかといったことを，自身の感覚と照らし合わせ，考えながらつくっている様子がわかる。

3.2.3　第３時　友達とつなげて旋律をつくる場面

第３時の学習目標は，「ペアで雅楽の音楽をつくろう」と提示された。本多の構想では，「４人組で旋律をつなげる」であったが，コロナ禍の状況に配慮し，２人組で意見交換しながら旋律をつなげるように変更された。出山教諭は，「これまでやってきたことを生かす」こと，「友達とつくる時も，音の動きを意識して，どうしたら，いいなと思える旋律になるか，どうしたら終わりっぽくなるか」などを考えながらつくることを強調した。

つくった旋律を友達とつなげて発表してみて，児童からは以下のような意見が出た。

C１：低い音で終わらせようと思ったんですけど，低い音で終わらせるとあまりしっくりこなくて，結局，高い音でのばして終わらせた。
C２：ソの音は終わる感じが出て，レはどっちでも，つないでもいい，終わってもいい。
C３：低めの〔音の〕方が終わった感じがする。

振り返りのワークシートの，「友達と雅楽の音楽をつくってみて気づいたこと（工夫・意識したこと）を書きましょう」という問いに対しても，以下のような記述が見られた。

・続く音，終わる音なども考えながら旋律を少しつくりかえて微調整したりしました。
・つなぐところの音がいきなりとばないように意識した。まとまりを出すために繰り返した。
・同じリズムのものを２回ずつでつくった。
・終わりの音，続けられる音をさがして，最後と最初（友達とつなげる部分）を同じ音にした。
・つなぎ目の音を近くするために音を変えた。上がったり下がったりをどうするか考えた。
・つなげ方や旋律の順番で全体のふんいきが変わっておもしろかったです。
・二分音符のリズムでそろえた。

ここでも，どの音でつなげたらいいか，どうしたら全体としてまとまりのある音楽になるか，どのリズムを使うか，音の上がり下がり・旋律の動きを全体としてどうするかといった点について，試しながら考えながらつくっていった児童の姿が見られた。

3.3　児童のつくった旋律の例

第３時の終わりには，全グループ（全ペア）がそれぞれ旋律をつなげて，発表まで行うことができた。その中のいくつかの例を，次に紹介する（楽譜６～10）。どの例も，２小節ごとに，Ａさん，Ｂさん，Ａさん，Ｂさんとつなげて全体で８小節の旋律をつくり，演奏している。

例１：楽譜６

１段目の１～２小節目と３～４小節目は同じリズムパターンを使っている。全体として，高い音から低い音へと降りていき，最後はソで終わっている。

例２：楽譜７

１段目，２段目とも３～４小節目が同じリズムパターンでまとまりをつくっている。前半１～２小節目のシンプルなリズムを，３～４小節目の休符が入るリズムで受けるようにして，変化をつけている。

例３：楽譜８

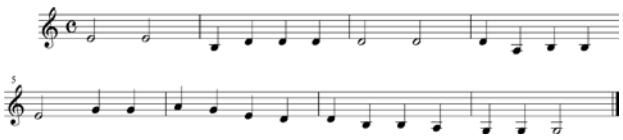
１段目，２段目ともペアで同じリズムを用いているが，それぞれ音の高さを変えることで，問いと答えのような掛け合いのおもしろさを出している。

例４：楽譜９

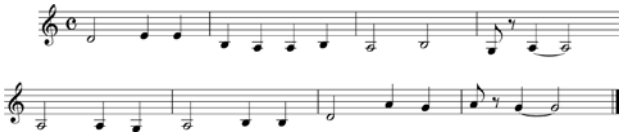
このペアも，リズムパターンを同じにしてまとまりをつくっている。２段目は，２小節目が「ソララ」に対して，４小節目が「ラソソソ」と対称的な音の形が意識されている。

例５：楽譜10

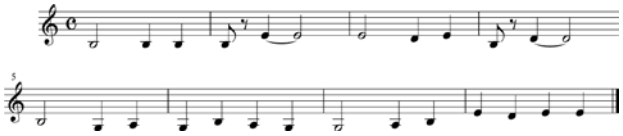
Ａさん，Ｂさんそれぞれが，同じリズムパターンを２



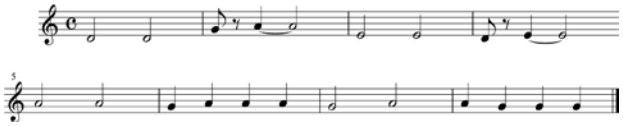
楽譜６



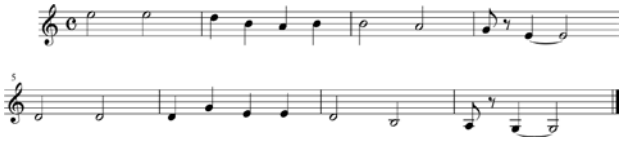
楽譜７



楽譜８



楽譜９



楽譜10

回使っている。全体として高い音から低い音へとどんどん下がっていく旋律となっている。

このように，ペアで旋律をつなげる活動においても，全体として雅楽らしい旋律をつくるため，またまとまりのある音楽とするため，どのリズムパターンを選択するか，上行，下行などどんな音の動きにするか，何の音で終わるかなどをよく考えながらつくっている様子が見られた。

3.4　学習のまとめ

出山教諭の授業では，音楽づくりを行ったあと，４時間目に《越天楽今様》をじっくりと鑑賞する時間が設定された。そして，題材全体の最後に，これまでの学習を振り返って，「雅楽についてわかったこと，よさや美しさはどんなところにあると思うか書きましょう」という問いが投げかけられた。

児童のワークシートの記述は，表１のとおりである。全員がそれぞれ自分の言葉で，雅楽のよさを記述できている。

「音の重なりがきれいでした」，「ゆとりがあり，落ち着いた感じ」，「音がよくのびてゆっくりで落ち着いている」，「和音のひびきや音がとまらないところから，ゆったりしていて，人々がすっきりする，リラックスできる」，「おだやかできれいな音色」，「音程が色々あるからきれい」等，ゆっくりとしたテンポのよさや，色々な楽器が重なり合う音色のよさを感じ取っている。

「音の強弱や上下がゆるやか」，「和っぽくなるには，音色や音の高さも大事」，「となりどうしの音がよく使われる」，「音がとばないようなリズム」といった記述からは，音楽づくりの活動での学びも雅楽のよさとして振り返っていることがわかる。最終的に，こうしたよさや美しさがあるからこそ，雅楽が今日まで長きにわたり続いてきたのだということに結び付けて理解している児童が何人も見られた。

表１　児童のワークシートの記述

雅楽はすごくむかしのものだけど、今風にアレンジすれば聴けるなと思いました。 音の重なりがきれいでした。
日本の音楽が美しくて繊細であること。 外国の歌とちがってゆとりがあり、落ち着いた感じがよかった。
日本の伝統の音楽で、今の音楽とは少しちがう楽器やリズムだった。 日本の昔からの楽器で知っていたものは、雅楽でも使われていた。琵琶。琴。 音の強弱や上下がゆるやか。 音がよくのびてゆっくりで落ち着いている音楽。 形を変えながら、今に続いている。
雅楽は、ただ音をあてはめるだけでなく、よい組み合わせを考えて演奏するすごいものだとわかった。 和音のひびきや音がとまらないところから、ゆったりとしていて、人々がすっきりする、リラックスできるところが良いところだと思う。
最初、聞いた時、少し不気味な感じがあったけど、よく聞いてみると、音の使い方がおもしろかったり、楽器がおもしろかったりして、楽しめた。 昔の日本というか、歴史などがつまっている音楽だから、長年つづいていると思いました。
けっこうふつうに聞いたことがあるけど、昔だと貴族しか聞けなかった音楽だったことがわかった。 雅楽のよさは、社会の歴史の動画につかえる。
基本的にゆっくりで、私は神秘的な日本の誇るべき音楽だと思いました。 オーケストラとかでも静かなのは、ゆっくりなのはあるけど、それとは違う独特なふんいきではないでしょうか。
これまでで一回も聞いたことがなくておもしろかった。
昔ながらの古風な感じだけど、日本らしい音楽で落ち着いている。 日本独特の雰囲気で、今の音楽をしたり、古風な感じで弾いたりと、色々とアレンジできて、たくさんの人が楽しめるところ。
各楽器の役割、音色の感じ、楽器の特徴。今の楽器にすごく似ているものもあった。 １つ１つの楽器のひびきがよいと思って、今までつづいてきたと思った。
和っぽくなるには、音色や音の高さも大事。 昔の曲は楽器を変えてもそれなりにアレンジできる。音はばらばらになるようになっているのに、音楽として聞こえる。
ずっと昔からつづいている。 となりどうしの音がよく使われる。 歌詞をつけたり応用ができる。
おだやかできれいな音色がきれいだった。
今様とふつうのでは、かなり明るさがちがう。 色々な楽器を使うので、弾いてみるのも楽しそう。 音がとばないようなリズム
色々な楽器を使っている。 音程が色々あるからきれい。 いろんな楽器があるから、強弱、大小が決められるのが美しいと思った。
越天楽の楽器はほとんど笛だから、高い音が出せたと思う。他にも太鼓もあったので、とても良い音色になっていたのですごいと思いました。
リズムが遅いので、１音１音がよくわかる。 吹き物や弾き物、打ち物などにわかれていて、設定がしっかりしていて良い。
ものすごくゆっくり。リズムがわかりにくいものもある。 いつも聞かない音だから、聞いていて楽しい。
日本ぽくて続いているのかなぁと思う。
音の高さの変化があまりない。 日本らしさが感じられた。少ない種類の楽器で、たくさんの音を出せる。
はげしくない。おとなしい。一つの音でも、ゆれがある。
色々な昔ふうの楽器があった。 音を下げると終わりっぽくなる。
日本のよさが出ている楽曲だなと思いました。 また音が重なった方が、雅楽だと感じやすいなと思いました。 日本ならではの感じがでていてよいなと思いました。 音のひびき方や奥深さがきれいだなと思いました。
ゆっくりとしたテンポが今にはないので、そこがよいところだと思う。 雅楽が続いているのは、聞くと落ち着くからだと思う。

４．おわりに

本研究では，日本の伝統音楽である雅楽を子どもたちがアクティブに学ぶことを目指し，授業実践プランの提案とその実践検証を行った。雅楽《越天楽》および《越天楽今様》の鑑賞と唱歌の体験，そして音楽づくりの活動との往還により，雅楽のよさ・本質を子どもたちが深くとらえることを目指した。個人およびペアでの旋律づくりを様々試す中で，旋律の動き方やリズム等を自身の感覚と照らし合わせ思考を働かせながらつくる児童の姿が見られた。また各活動ごとに適切な問いを投げかけ，自分たちの活動の意味を言葉で明確に捉えさせることをとおして，子どもたちの思考を活性化させ，最終的には，全ペアが自分たちの雅楽の旋律をつくりつなげて発表し，雅楽のよさや美しさを児童なりの言葉で全員が記述することができた。

課題としては，次の２点を挙げる。１つには，コロナ禍での実践であったため，使える楽器が限定されたが，たとえばリコーダーなど，息を使った楽器であればまた違った音づくり・音楽づくりが可能となったのではないかと予想される。今回使用したキーボード以外の楽器での音楽づくりも，別の機会をとらえ実践したい。２つには，本実践では，終わりの音についてのあらかじめの指示は全くしなかった。ソで終わった感じがするのか，ラで終わった感じがするのか，どこまで児童の感覚にゆだねるかということは一つの課題となった[5)]。低学年のうちからわらべうたに親しみ，日本的な音感覚を継続して身につけた場合，今回のようなレミソラシの音による旋律づくりはどのような結果となるだろうか。これについてもまた，他日を期したいと考える。

付　記

本稿は科学研究費補助金「日本伝統音楽と民族音楽を位置づけた学習理論構築と実践開発―小泉文夫の理論を軸に―」（代表：権藤敦子，課題番号18K02625）の研究成果の一部である。

注

1．学習指導要領解説音楽編では「諸外国の音楽」「諸民族の音楽」という語が使われるが，本稿では，世界の多様な音楽という意味で「世界の音楽」という語を用いる。「世界音楽」(world musics)というとまた違った含意が生まれる（クック 2022，pp. 180-183)。

2．雅楽《越天楽》は中学校の鑑賞教材となっている一方，小学校第６学年の歌唱共通教材《越天楽今様》の学習においても教材として扱われるので，本題材は小学校６年でも中学校でも扱われることを想定して構想した。

3．核音，テトラコルドの用語は，小泉文夫が提唱した日本の音階の理論にもとづく。

4．本多は６年生の１クラスの２時間目，３時間目を参観しビデオに記録した。本稿での考察は，その時の観察，映像記録の分析，および児童のワークシート（N＝24）の記述の分析にもとづく。６年生の１月という時期のため，授業出席者数は若干，少なくなっている。

5．楽譜３に見たように，ラが核音であり，《越天楽今様》の終わりの音もラであるが，児童からはソが終わった感じがするという意見が比較的多く出た。

引用・参考文献

Campbell, Patricia Shehan.(2004). *Teaching Music Globally: Experiencing Music, Expressing Culture*. New York: Oxford University Press.

大田美郁（2019）「小泉文夫の音楽教育論の再検討―諸民族の音楽学習の観点から」『音楽教育研究ジャーナル』第51号，pp. 1-14.

大田美郁・本多佐保美（2020）「アジア地域の音楽を教材とする中学校音楽科授業プランの提案―小泉文夫の音楽教育論を土台とした授業実践開発」『音楽教育実践ジャーナル』vol. 18，pp. 84-93.

クック，N．（2022）『音楽とは』福中冬子訳，音楽之友社.

小泉文夫編（1969）『わらべうたの研究』研究編，有限会社稲葉印刷所.

小泉文夫（1986）『子どもの遊びとうた―わらべうたは生きている』草思社.

ソーヤー，K．（2009）『凡才の集団は孤高の天才に勝る』金子宣子訳，ダイヤモンド社.

徳丸吉彦・日本音楽の教育と研究をつなぐ会（2019）『唱歌で学ぶ日本音楽』音楽之友社.

平野次郎（2017a）『「先生，楽しいね！」と言わせる音楽づくり入門ワザ21』株式会社鈴木楽器製作所.

平野次郎編著（2017b）『「資質・能力」を育成する音楽科授業モデル』学事出版.

本多佐保美（1995）「教材としての雅楽《越天楽》の学習内容に関する一考察―唱歌と打楽器のリズム構造に着目した授業構想」『音楽教育研究ジャーナル』第２号，pp. 3-24.

本多佐保美（2017）「昭和40年代中学校音楽教科書にみる日本伝統音楽の取扱い―小泉文夫編集教科書における日本音階の学習指導を中心に」『千葉大学教育学部研究紀要』第65巻，pp. 7-13.

本多佐保美（2020）「《越天楽》の打ち物に焦点化した授業実践」，本多佐保美編『日本音楽を学校でどう教えるか』開成出版，pp. 74-75.

本多佐保美（2021）「ユネスコ・アジア文化センター『アジア地域音楽教材共同制作事業』の再検討―教材の音楽的特質および傾向分析を軸に―」『千葉大学教育学部研究紀要』第69巻，pp. 91-98.

本多佐保美・玉城秀晃・清水麻希子（2019，2020，2021）「アジア地域の諸民族の音楽に関する題材開発研究―音楽の特徴とその多様性を理解する生徒の育成（１）～（３）」『千葉大学教育学部　附属学校園間連携研究成果報告書』

松下佳代編（2015）『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房.

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』，東洋館出版社.